



No.196

ティークレイク

Tea Break

一万円と僕

会員 正林 真之

千葉県の田舎で生まれ、そこでそのまま育った。そうした子どもの頃は、「市中に最も流通しているのは一万円札である」と新聞に書かれていたことが、どうにも信じられなかった。田舎町では、子どもにとって一万円札というのはまさに高嶺の花。耳にすることはあっても、そう簡単に見ることなどなかった。お小遣いに加えてバイト代を稼ぐようになって、一万円札が財布の中にあることは、まずない。そうした状況で「市中に最も流通しているのが一万円札だ」と言われても、ピンと来るはずがない。

そうした自分が高校生になって、それから大学受験をし、何とか都内の大学に合格したら、皆がそれなりに祝福してくれる。そこで、これから東京の大叔父に会いに行くのだと言うと、地元で小さな町工場を経営していた伯父が、作業服のまま工場の事務室にちょっこと入ったかと思うと、「マー坊、東京に行くのか。なら、小遣いやろう」と会社のレジからついさっき出したであろう10枚の千円札をくれた。

いい加減「マー坊」はやめてくれよ、もう大学生なんだからと口では言いながらも、心は弾み、伯父の「ばーか。自分で稼いで誰かを養っていないうちは、まだ坊やだよ」とからかう声を後に、もらったお札を握りしめて駅に向かった。電車の中で考えることは、「この一万円で何を買おうか」、そんなことだけだった。

東京駅に着くと、そこで待ってくれていた大叔父は、当時の大企業のエリートサラリーマンらしく、びしっと決めたスーツの出で立ちで、「マーちゃん、お祝いだよ」と、皺ひとつない新札の一万円を差し出した。やはり「いい加減、もう子供じゃないんだから、マーちゃんはやめてくださいよ」と口を尖らす私に対して、「僕に

とって、マーちゃんはいつまでもマーちゃんだよ」。そんな答えが返ってきた。それがなぜかわからないが、同じような愛称でも、その時は、なぜか伯父には子ども扱いされ、大叔父には可愛がられているような気がしたものだ。でも「また一万円」と、更にまたお金が増えたものだから、さすがに祝福された気になり、大学に受かって本当に良かったと思えるのだから、まさに現金なものである。

そして大叔父に食事をご馳走になった後、暫くしてから東京を散策し、家路についた。お金のほうは、もちろん、伯父のくれた千円札のほうから使った。それはそうだろう。新札の一万円札なんて、そうそうご縁が無いのである。すごく珍しく、とてもではないが使おうなんて気になれない。なので、とても大事に、あたかも貴重な標本の如く、大切に机の中にしまいこんだ。そして、「実業家の伯父は、使いやすようと、あえて千円札のほうを渡してくれたのかもしれない。一方、大叔父のほうは、かえって使い難いようにとの配慮で新札のほうをくれたのかもしれない。」と、そんなふう勝手に思ったりもした。

ところで、弁理士となった現在、中小企業支援を行うに際しては、「苦勞して稼いだ1万円も、楽しんで得た1万円も、一万円は一万円。経営者には、そういった割り切りが必要だ」と説いたりする。そのココロは、「夢を追うだけではなく、稼げるところでしっかりと稼いでください。儲けられるところでしっかりと儲けてください。」と、そういうことである。シュリーマンのように、「トロイの遺跡を掘る」という夢を実現するために、まずは事業で成功し、儲けるようにしましょう。そんな説論をする。そしてそれは一理あるだろう。実際、このこ

とを理解せずに、世の中に必要なものを提供し続ける一方で、最後はカネ詰まりで終わってしまう経営者も多いのである。

今になって考えてみれば、高校卒業の当時は、そんな理屈を分かってはいなかったが、千円札十枚からなる一万円も、一万円札一枚も、全く同じ価値であるという数学的思考の下で、それらの価値の違いも分からずに、使いやすいほうから使ったわけである。

ただ、東京の大叔父のほうは大企業勤めである一方で、田舎の伯父のほうは地方の中小企業、それも下請け企業だった。彼らのほうにいかなる配慮があったにせよ、一万円を稼ぐ難易度に大きな差があったことは明らかである。特にその当時は、今のような「下請けいじめ」を防止しようとする発想すら無かった時代である。それはそれは大変であったろうと思う。

しわくちの10枚の千円札と、ぴんと張った新札の一万円札。この一万円、伯父さんの商品をいくつ納入すれば稼げるんだろうか。かつて電車の中で何に使おうかとばかり思っていた自分が、そして「使いやすいように…」などと能天気考えた自分が、今はそんなふうと思う。そしてまた、伯父の言った「誰かを養って一人前

だ」というのが、苦勞して得たお金をその人のために笑って差し出すことだということが分かって、“僕”は大人になった。

今だったら、単に使いやすいからという理由だけで「安易に、しわくちの10枚の千円札のほうから使う」なんてことはまずしないだろう、いや、とてもではないができないだろう。こんな自分は、もし伯父がまだ生きていたならば、「どうだ。これで一人前だ。マー坊はやめてくれよ」と言えただろうか。そして、今の私を見たら、“僕”のことを散々に子ども扱いした伯父は、一体何と言うのだろうか。

もっとも、既に“私”となったこちらとて、伯父に報告したかったことは山ほどある。けれども、今は弁理士となった私が中小企業支援に赴く際、ふと、私の中の“僕”が蘇る。そして、そうしたところの作業服の社長を見るたびに、そんなことが思い出され、在りし日の伯父の笑顔を思い出し、“私”になった僕が伯父に言えなかった分を、弁理士として投げかけている。知財コンサルティングだ中小企業支援だと偉そうには言っても、その実態は、伯父の影を“僕”がただ追いかけているだけ。実は、そんなものなのかもしれない。